

別添資料 4

国産牛肉の小売価格は需給を反映しているか？

1. はじめに

国産牛肉の小売価格が需給を反映しなくなったといわれて久しい。しかしながら、公的な議論の場（国会、審議会、公正取引委員会）、メディアの報道において、深刻な問題としては取り上げられてきていない。消費者側は、高止まっている国産牛肉の小売価格に不満はあっても安い輸入牛肉や牛肉以外の食肉を購入することで問題を回避しているし、生産者側も低価格で推移している農家販売価格ではあるが、低価格時の価格差補てん制度がカバーする範囲が、すなわち補てん金の金額がある程度の範囲内にあれば大きな声を上げにくいという状況にある。

一般的な問題意識が低いとはいっても、国産牛肉の小売価格が高止まっているとすれば議論が必要となる。

ここでは、国産牛肉の小売価格が高止まっているのは事実といえるのか？高止まっている場合、原因は何か？について分析を試みた。

2. 議論の背景となっている小売価格の変動

一般に牛肉の小売価格を引用する場合には、長期性、継続性（昭和25年開始）と公的な性から総務省の「小売物価統計調査」が用いられている。一方、牛肉の卸売価格は長期性、継続性（昭和28年開始）、小売市場での「せり」により決定した価格を集計しているという信頼性から農林水産省の「食肉流通統計」が用いられている。

この2つの価格の推移を見ると昭和50年代半ばから卸売価格の水準が1kg当たり2千円以下の水準で推移している一方で、小売価格は5千円代からピーク時（平成20年）9千円を超える水準に達し、両者の価格差が開いたことがわかる。近年、小売価格は低下傾向にあるが、両者の価格差64百円は平成13年と同等で相当の差があるといえる。また、年単位では両者の変動が連動しているようには見えず、議論が巻き起こっているとは言えないまでも、生産者、流通業者には小売価格の高止まりは認識されている。

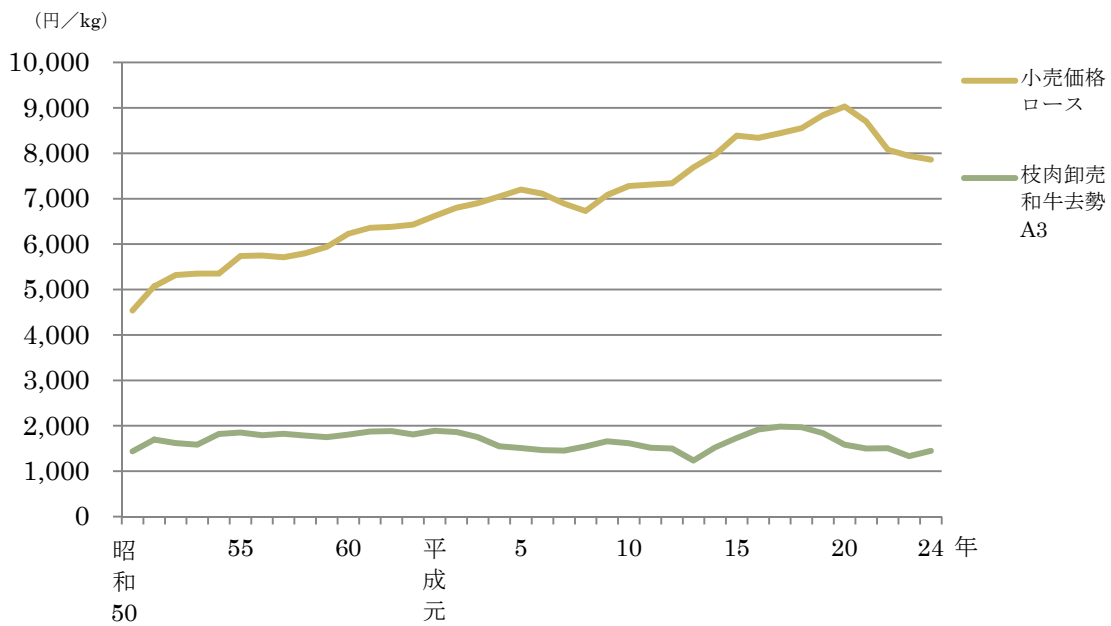


図1 牛肉の小売価格と卸売価格の推移

資料：総務省「小売物価統計調査」

農林水産省「畜産物流通統計」

3. 公的調査の概要

(1) 小売価格

1) 総務省「小売物価統計調査報告」

毎月の調査、昭和25年6月開始

調査部位は「ロース」

調査地点は全国81都市

2) (独) 農畜産業振興機構調べ

毎月の調査、平成3年度から

品種区分「和牛」、「交雑種」、「その他」

調査部位は「かた」、「ばら」、「サーロイン」、「もも」

「通常価格」と「特売価格」についても調査

調査店舗、全国の量販店26店舗、食肉専門店60店舗

(2) 卸売価格（枝肉）

農林水産省「食肉流通統計」

毎月の調査、昭和28年から

区分は、「めす和牛」、「去勢和牛」、「乳用めす牛」、「乳用肥育おす牛」、「交雑種めす牛」、「交雑種去勢牛」

調査等級は15等級別

調査市場は全国28市場

(3) 卸売価格（部分肉）

（独）農畜産業振興機構調べ「仲間相場」

毎月の調査、平成11年から

品種・等級は「去勢和牛（A4）」、「去勢和牛（B3，B2の平均）」

「交雑種（B3，B2の平均）」、「乳用肥育おす牛（B3，B2の平均）」

調査部位は「かた」、「かたロース」、「かたばら」、「サーロイン」、「うちもも」

(4) 農家販売価格

農林水産省「農業物価指数」

毎月の調査、昭和28年から

品種は「去勢若齢肥育和牛」、「めす肥育和牛」、「乳用おす肥育」

4. 農家販売価格、卸売価格、小売価格の連動性

(1) 2つの小売価格調査と卸売価格（枝肉）との連動性

総務省の調査は継続性からみて和牛のロースを対象としていると考えられることから和牛の卸売価格との関連を見ると、価格の水準は高い位置で推移しているものの長期的には平成20年から平成23年にかけての低落傾向及びその後最近までの上昇傾向が卸売価格と同様にみられることから関連していないとは言い切れない。

農畜産業振興機構の調査のうち和牛の通常価格については、総務省調査と同様な卸売価格との連動が見られる。特売価格は変動が大きく、そのままでは使いにくい。

以上のことから、総務省調査と農畜産業振興機構調査のうち通常価格調査が中長期的な分析には有効であると考えられる。

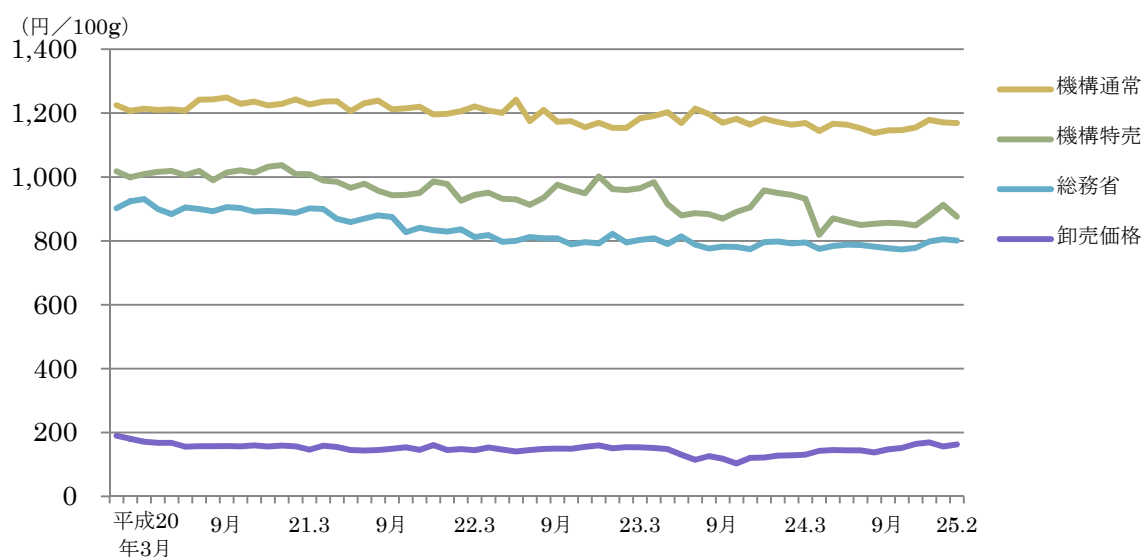


図2 国産牛肉の小売価格（2調査）と卸売価格の推移

（2）農家販売価格と卸売価格（枝肉）との連動性

農家販売価格と卸売価格は、グラフ上でもよく連動している。

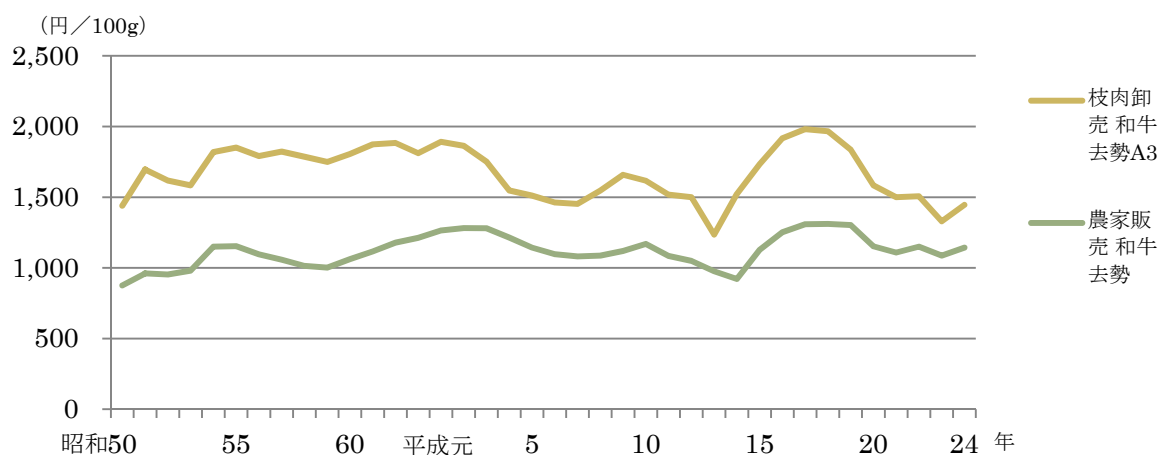


図3 国産牛（黒部和種）の農家販売価格と卸売価格（枝肉）の推移

資料：農林水産省「食肉流通統計」、「農作物価指数」

（3）枝肉（卸売）価格と部分肉（卸売仲間）価格との連動性

牛肉は流通段階では、大きく分けて14種類（部位）の部分肉の形態で行われることが多く、枝肉と部分肉の間に連動があるかを見た。部分肉のうち高級なものであるロースと枝肉との間には連動が見られた。低価格商品のかたばらは、変動が抑えられていることが見られた。

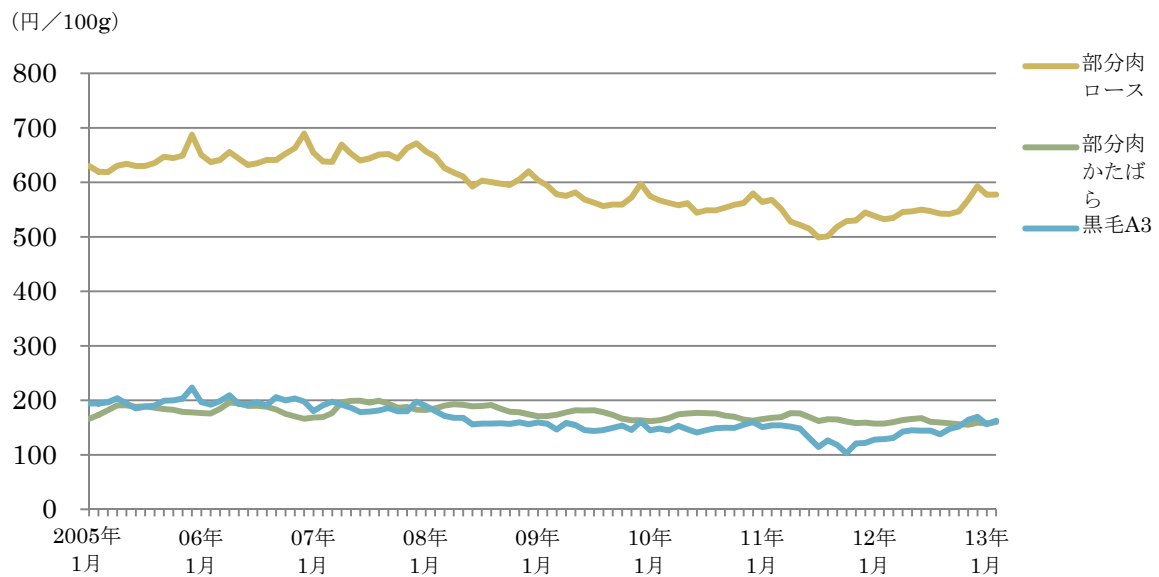


図4 黒毛和種の枝肉価格と部分肉価格の推移

資料：農林水産省「食肉流通統計」、農畜産業振興機構調べ「部分肉仲間相場」

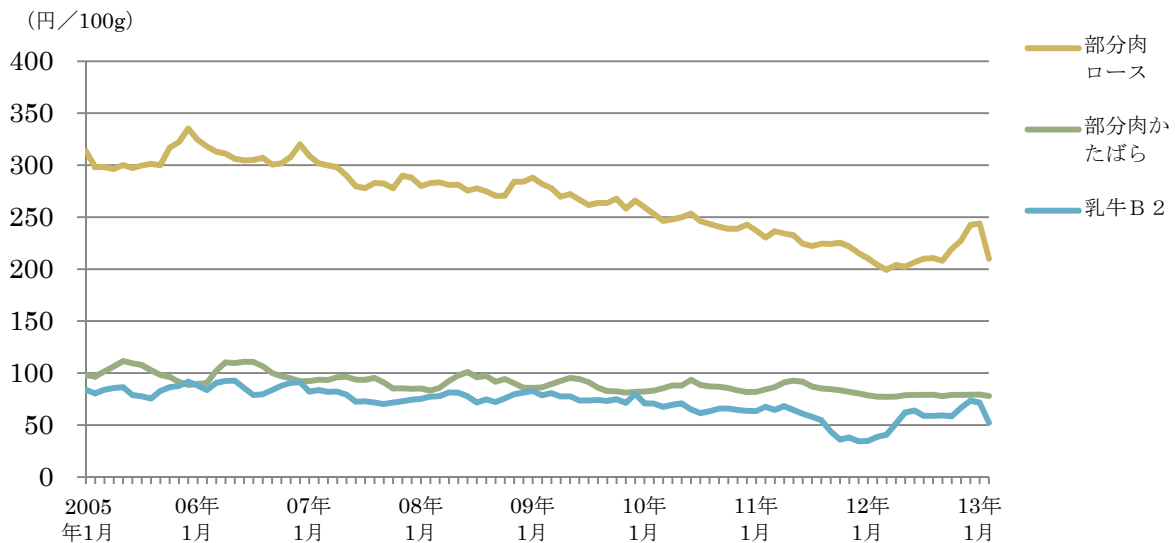


図5 乳用種の枝肉価格と部分肉価格の推移

資料：農林水産省「食肉流通統計」、農畜産業振興機構調べ「部分肉仲間相場」

(4) 部位別小売価格と卸売価格の連動

牛肉は小売段階では、「ロース」、「もも」といった部位に分けられて販売され、「ロース」は「しゃぶしゃぶ」、「すきやき」等向けの高級食材、「もも」は「炒め物」等向けの低級食材として価格に差がつけられている。また、部位毎に鍋物向けの寒い時期の需要、焼肉等

の暑い時期の需要と需要期が異なることから、小売業者は天候等も勘案した販売価格を設定し、頻繁にそれを変動させている。従って、枝肉価格である卸売価格と部位別の価格である小売価格を比較することにはそもそも問題がある。

そこで、例えば米国農務省では、小売段階、卸売段階で部位別の価格調査を行い、部位別の重量を勘案して枝肉換算した数値を計算して、小売価格、卸売価格として公表している。我が国では、米国ほどの詳細な情報が入手できていないことから、ここでは部位別の調査がある農畜産業振興機構調査の小売価格と卸売価格の推移を部位別に見てみた。その際、季節変動を大まかに調整するために12カ月の移動平均を数値として使用した。

小売価格の変動は、高級部位である「ロース」において大きく、卸売価格の変動とも似通っている。低級部位も変動があるが変動幅が抑えられている。

従って、国産牛肉において、小売価格（精肉）と卸売価格（枝肉）価格が連動していないとは言いきれない。ただし、2001年の我が国でBSE発生による混乱を脱した2002年に始まった価格上昇は、小売も卸売も同時であるのに対し、価格の低下が卸売では2006年に始まったのに対し、小売は2009年と遅れて始まったこと、卸売価格が上昇開始時まで低下しているのに対し、小売価格の低下が2001年価格と2009年価格の間にあることから、小売価格の需給の反映具合は鈍いこととなっている。

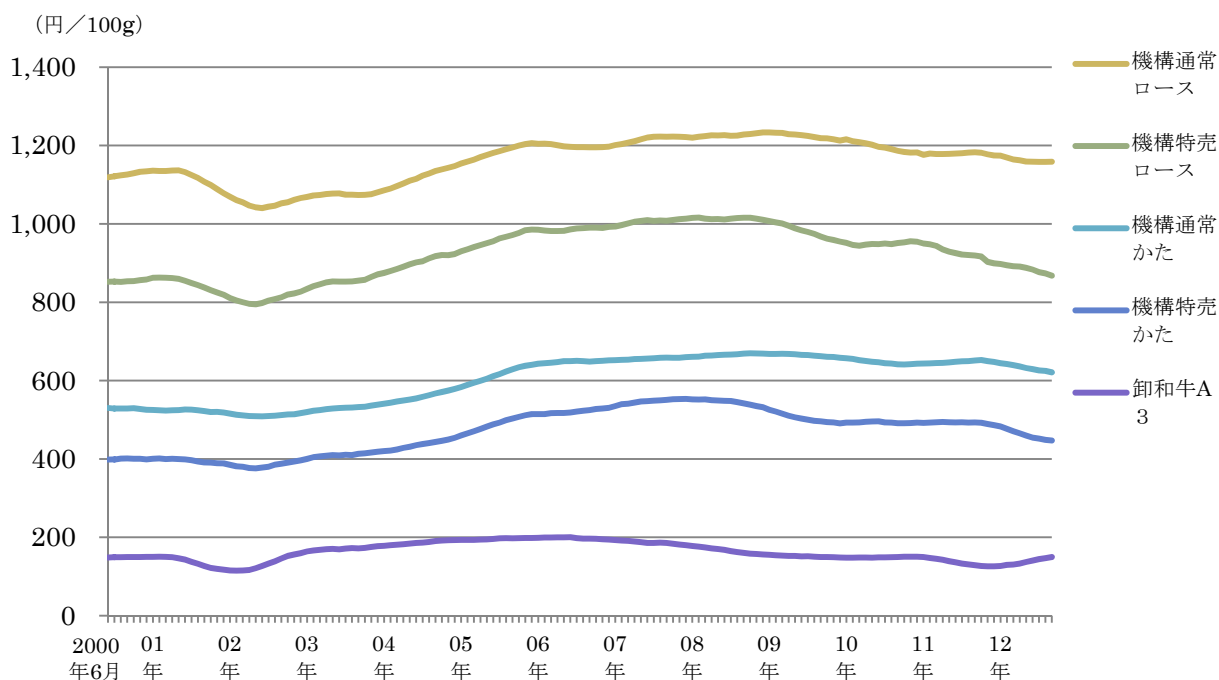


図6 黒毛和種の部位別小売価格（通常、特売）と卸売価格の推移

資料：農林水産省「食肉流通統計」、農畜産業振興機構調べ「部分肉仲間相場」

注：各月の数値は、12か月移動平均

5. まとめ

国産牛肉の卸売価格（枝肉）は、高級牛肉とされる黒毛和種（A3規格）のものでも過去40年間1キロ2千円以下の水準で推移している一方、小売価格は長期的な上昇傾向にあり、2倍近い伸びを示し、消費者にとっては、以前にもまして高級な食材となっている。ここでは、小売価格に関するいくつかの公的調査の中から、分析の対象とすべき公的調査を選択した上で、過去10年間の卸売価格と小売価格の連動状況を見た。

その結果、2001年に発生したBSEにより、卸売価格、小売価格ともに大きく水準を下げたが、その後、卸売価格は2006年まで、小売価格は2009年まで上昇し、近年は下降傾向にある。長期傾向としては同様といえるが、下降時にタイムラグがあること（小売価格の下降開始時期が遅れている）、下降の水準に差があること（小売価格が下がりきらない）ことが見て取れた。